



TITLE:

パースの「心の哲学」の再構築 : 美学へのパース記号論の応用(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

加藤, 隆文

CITATION:

加藤, 隆文. パースの「心の哲学」の再構築 : 美学へのパース記号論の応用. 京都大学, 2018, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20832>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	加藤 隆文
論文題目	パースの「心の哲学」の再構築：美学へのパース記号論の応用		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文の最終的な目標は、十九世紀後半にアメリカで生まれたプラグマティズムという哲学上の立場から美学（芸術や感性的なものについての理論的研究）を構想することにある。本論文では、C・S・パースのプラグマティズム、とりわけ心をめぐる彼の諸議論に注目することで、芸術を含む様々な文化現象、ひいては美学という学問体系一般の形成・発展について考察する際にパース記号論が有効であることを示す。</p> <p>第1章では、プラグマティズムと美学が交差している具体的事例と思われる先行の諸議論を検討する。</p> <p>1.1節では、これまでにプラグマティストの陣営から提出された芸術論を批判的に検討する。現代に至るまで最も影響力を発揮したプラグマティストの芸術論は、J・デューイが『経験としての芸術』（1934）において提唱した〈鑑賞者と作者が芸術的対象と相互作用することで得る経験こそが芸術なのだ〉という芸術論である。近年では、アメリカの美学者R・シュスターマンがこの理論を踏襲して提唱した「プラグマティストの美学」が注目された。しかし、デューイやシュスターマンの芸術理論は、「芸術」と呼ばれるものの範囲を広げるための手段、芸術を民主化するための手段としては有効かもしれないが、それ以上の積極的な批評言説を提出することは困難である。そこで本論文は、デューイではなくパースのプラグマティズムに注目する。</p> <p>1.2節では、パースの思想と美学の交差点を示唆する先行の試みとして、芸術批評家R・クラウスが、パース記号論のインデックス概念を芸術作品の批評に応用して展開する、いわゆる「指標論」に注目する。この理論は、C・グリーンバーグらの推進した形式主義的な芸術批評と距離を取り、芸術作品が物理的な過程を現前させていることに注意を向ける点で重要である。しかし、こうした「物理的現前の痕跡」としての芸術観がいかなる態度へ結びつくのかは示されておらず、脱形式主義以上の意義は詳らかではない。この現状を踏まえると、インデックス概念について、クラウスとも独立に、パース思想の特性を踏まえた意義を再検討しなければならない。他方、パース自身の提唱する学問体系の中にも「美学(esthetics)」と呼ばれる領域は存在する。この「美学」は「規範学(normative sciences)」というパース独自の学問の一種として構想されているため、パースの思想体系を踏まえたうえで、現代の美学と独立に検討する必要がある。とはいえ、パースの思想体系において規範学とインデックスは共通した重要な意義を有しており、規範学を踏まえた</p>			

上でインデックス概念を再検討し、これをパースのプラグマティズムに基づく美学への構想に役立てるということが可能であると本論文は提案する。

続いて1.3節では、人類学者A・ジェルがパースのインデックス概念を独自に活用して提唱する「芸術の人類学」という理論に注目する。ジェルの「芸術の人類学」においてインデックスは、社会的な慣習に由来する推論過程を経て他者の意図を媒介する人工物を指す。この理論は、ある意図によって一連の行為作用(action)を開始させる性質、すなわち「行為作用性(agency)」が、無数の人や物によって媒介される無限の連鎖過程を描き出す。さらにジェルは、たとえばマオリ族の集会所は、代々この集会所を造り育ててきた共同体の祖先たちの集合的な行為作用性を媒介しているインデックスであると見なす。こうした態度は必ずしもパースに忠実ではないが、人間の行為作用性のありかを多層的に捉える視点を提供している。さらに、パースの記号論的宇宙観の中で「芸術の人類学」を読み替えれば、この理論は人間以外の生命体をも含めた広い生態系の行為作用性の体系を思い描く研究へも開かれうる。

第1章の議論は、心を生態系の中で発展した記号過程として捉えるパース記号論のうちに、パースのプラグマティズムに基づく美学を提案するための足がかりがあるという見通しを与えてくれる。特に、ジェルの「芸術の人類学」が心の哲学における「拡張した心」に似た主張を展開している点が興味深い。これらの関心を踏まえ、第2章は心をめぐるパースの思想を現代の心の哲学の文脈の中で語り直す研究、いわばパースの「心の哲学」を再構築する研究を行う。本論文では主として、(1)「拡張した心」とパース思想の比較研究、(2)パース思想に基づく命題的態度の理論の構築の2つを遂行する。

2.1節では、(1)「拡張した心」とパース思想の比較研究を行う。パース研究者C・F・ディレイニーは、パースの内観能力の否定ならびに〈心的作用は全て記号の推論行為である〉という主張を受け、パースの心の理論を一種の外在主義として説明している。本論文は、この議論を踏まえた上で、さらに、A・クラークらが「拡張した心」理論をとおして主張する能動的外在主義の一種としてパースの心の理論を捉えることもできると主張する。ただし、「拡張した心」は、従来は頭蓋内・皮膚内に内在すると考えられてきた「心」が生命体の外的環境に広がっているという主張である。しかし、この理論の実質は心的システムの捉え方の更新の提案に過ぎず、これは従来から存在した「心」が「拡張している」という主張にはなりえないという問題を残す。そこで本論文は、続いて、パースの心の理論の持つ独特の自己概念に注目する。パースの思想において、自己とは心の一種であり、つまりは記号過程である。そして、自己意識は、自身の無知や誤りに気づくことから推論され、獲得される。さらに、自己は外的世界と内的世界を行き来することで自己制御を確立し、進化を続けていく。こうした発想を踏まえれば、パースの心の理論は、

能動的外在主義というよりはむしろ、連続主義に基づく特殊な自己概念を含んだ記号一元論として立ち現れる。パースの連続主義に基づく自己概念は、「拡張した心」理論に対する有効な修正案を提供する。パース記号論によって修正された「拡張した心」理論は、心的過程の内在性と外在性を問い直し、むしろ多層的な連続体としての認知システム像を提案する主張として、受け入れ可能になる。

次に2.2節で、(2) パース思想に基づく命題的態度の理論の構築を遂行する。W・V・O・クワインは、パース思想の命題中心的な側面を指摘しつつ、プラグマティズムの格率を行動主義的な思想として理解している。しかし、信念などの命題的態度は、単純な行動傾向として理解するだけでは不十分である。プラグマティズムの格率に即して言えば、たとえば「ダイヤモンドは硬い」という信念は、「ダイヤモンドは他の色々な物質を擦り付けても傷がつかないだろう」と考える行動傾向等へと結びつかなければならない。そのためには、この信念と思考との間の結びつきがいかにして確立するのかを説明する理論が必要である。そこで本稿は、パースの命題的態度の理論を、むしろ機能主義的な枠組みのもとで構想する。こうした方向性は、J・フォーダーが命題的態度をめぐって提出した内的表象システムと一致する。

ただし、命題的態度の理論にどのような意味論を用意するのかという点で、本論文はフォーダーと意見を異にする。フォーダーは機能的役割意味論につきまとう困難を指摘し、自身は情報意味論と概念原子論を選択する。一方、本論の提案するパースの命題的態度の理論は、「パース的習慣に基づく意味論」(PH意味論)を提案する。プラグマティズムの格率に則れば命題的態度は因果的ネットワーク内における機能的役割(いかなる行動傾向へ推移するか)によって個別化されると考えられるが、この因果的ネットワークがなぜ各命題同士の推論的役割のネットワークと高度に一致するのかを説明する理論が必要である。PH意味論は、アブダクション、帰納、演繹という3つの推論過程を経て成立する習慣という概念によって、これら両ネットワークの関連性を説明しようとする意味論である。これに関連する論点として、フォーダーによる概念プラグマティズム批判に対して、パースのプラグマティズムの立場から応答する必要があるだろう。この点については次節で考察する。

2.3節では、パースのプラグマティズムの定式化の変遷を確認した上で、パースのプラグマティズムが現代の心の哲学の論者の関心とどう重なるのかを総合的に検討する。パースのプラグマティズムは、記号の意味を「CならばXせよ」ないし「CならばXするだろう」の形で表される[C, X]の習慣的傾向性に帰着させる理論であると理解できる。2.2節で提出するパース思想に基づく命題的態度の背景には、このプラグマティズムがある。本論文では、この理論をL・R・ベイカーによる命題的態度の説明を参照することで、より精緻化する。また、パースは「スコラ的事実論(scholastic realism)」という説を主張し、自然界で実際に作用している

一般的法則は実在のものと見なしている。この実在論において「実在」と捉えられているのは物理的対象ではなく記号過程である。こうした実在論は奇異に映るかもしれないが、ベイカーが提案している実践的実在論 (Practical Realism) は命題的態度が必ずしも脳の物理的状態に還元されないことを主張している。これらのことから、ベイカーの理論は、パースの命題的態度の理論の発展性を現代の文脈において評価する上で有効な参照点となりうるだろう。

他方、心の哲学の文脈に置かれた時、プラグマティストは、フォーダーによる概念プラグマティズム批判に応答する必要に迫られる。本論文では、カルナップの意味公準という考えを活用して概念プラグマティズムを擁護するリーヴスの論考に注目する。フォーダーの批判によると、概念の分析的定義を放棄する概念プラグマティズムは思考の合成性を説明できなくなってしまう。一方、リーヴスは概念の理論について、〈概念の内的構造を認めるか否か（原子論を採るか否か）〉〈推論的役割意味論を採るか情報意味論を採るか〉という二つの問いを軸にして、四通りの理論がありうるとまとめている。フォーダーの立場は〈原子論＋情報意味論〉であるが、リーヴスは自身が有望視する「意味公準プラグマティズム」を〈原子論＋推論的役割意味論〉の一種と位置づける。本論文は、カルナップの思想が言語の記述ではなく将来の言語活動のための規範を提案する側面を持つということを踏まえ、リーヴスとは異なる形で「意味公準プラグマティズム」を主張する。すなわち、設定された規範の上では意味論的規則を参照した分析性を認められると考え、このことによってフォーダーの批判を回避する。

第3章では、第2章で導き出したパースの「心の哲学」の発想を美学の問題と接続する。

まず3.1節で、いわゆる分析美学を主軸に展開してきた二十世紀の英語圏美学を概観した上で、シュスターマンが一九八〇年代に行った分析美学批判を検討する。本論文は、シュスターマンの批判には同意するが、現代の英語圏美学において目立つようになってきた経験的美学は、シュスターマンの批判への応答になっていると考え、これに注目する。そして、経験的美学の成果を適切に評価し、美学という体系全体のうちに取り込むためには、プラグマティズムの態度が不可欠であることを論じる。

3.2節と3.3節では、それぞれパース思想に注目する人類学者の論考に注目する。3.2節では、一九八八年にニューヨークで開催された展覧会「ART/artifact」をめぐる考察を経てジェルが提出している「畏としての芸術」という考えに着目する。ジェルは、パース思想の諸概念を活用して「芸術の人類学」という理論を提唱しており（1.3節）、「畏としての芸術」は、この理論の延長線上にある芸術観と言える。展覧会「ART/artifact」では、狩猟用の網が芸術作品のように（インスレーション作品のように）展示された。ここには芸術の定義を問い直す意図が見て取

れ、ジェルもそうした問題意識を共有している。しかし、本論文はむしろ、ジェルの論考を、アート・ワールドに触れた一人類学者の態度表明として受け取る。こうして、本論文がジェルの論考から引き出す芸術論は、次のようにまとめられる。すなわち、動物を捕獲するための罠は、罠の制作者である狩人と罠の犠牲者である動物が共に属している生態系の表象となっていると考えられる。続いて3.3節では、人類学者E・コーンの研究に注目する。コーンは、パースの記号論から着想を得て、エクアドルのルナ族が森林の中で構築している多層的な自我の生態系を説明している。多層的というのは、ルナ族は「私」「私たち」という一人称の自意識を動物や周囲の環境へ適用する場合があるため、森林が様々な位相の自我の集合的な生態系として捉えられることを指している。

3.4節では、パース記号論（つまりパースの「心の哲学」）を美学に応用することで、「パースのプラグマティズムに基づく美学」を提案し、その意義を問う。ジェルとコーンはそれぞれに、巨大な記号過程である生態系内で進化してきた個々の記号過程から人間の種々の活動が導かれるという発想を有している。コーンの思想は芸術と直接的に関わるものではないが、本論文は、ジェルの「罠としての芸術」概念から、芸術を生態系の表象と捉える芸術論を見出す。そして、この芸術論を採用する場合に、コーンの研究は、記号の生態系についてのパース思想の洞察を明らかにする補助線として有意な参照点となる。本論文の芸術観からすれば、特定の歴史を背負ったアート・ワールドもまた、一つの生態系と言えるかもしれない。しかし、これは限定された領域の一生態系に過ぎない。本論文ではプラグマティズムの美学を、記号の生態系の生成変化を理解し、未来の生態系を構想する思想として提示したい。さらに本稿は、美学それ自体を一つの巨大な記号過程と捉えることを提案する。プラグマティズムの美学は、美学という体系内で記号過程が発展していく際に参照すべき規範を提案するという側面を持つ。この点では、本論文はパース思想における「規範学」としての美学という発想を受け継ぐものである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、プラグマティズムの祖パースの記号論を「心の哲学」として再構成した上で、これを美学の諸問題へと応用するものである。アングロサクソン系の美学としては、近年「分析美学」が隆盛をきわめているが、本論文は、これとは別のアングロサクソン系の哲学的遺産を現代に甦らせて新たな美学を提唱する、意欲的な試みである。効果的な思考実験や文化人類学をはじめとする経験科学からの興味深い事例が随所に織り込まれ、その主張に説得力と生彩を与えている。

第1章では、従来「プラグマティズムの美学」と呼ばれ、「美的経験」を核概念として構築されてきた、古くはデューイ、近年ではシュスターマンの美学理論を批判的に検討し、これらに現代的意義を見出すことの限界を指摘した上で、「プラグマティズムの美学」を新たに構想するためには、この哲学的伝統の祖であるパースに立ち戻る必要があることを指摘する。その上で、パースの思想、とりわけその記号論における核概念である「インデックス」が美学の諸問題と交叉した事例として、クラウスの芸術批評（「指標論」）とジェルの「芸術の人類学」を取り上げて検証する。どちらも、記号論的美学の豊かな可能性を示唆している。

しかし、「プラグマティズムの美学」の新たな構築を目指す論者は、以上のようなパース思想と美学との断片的な交叉には、当然のことながら満足しない。インデックス・作者・原型・受容者の四項を自在に組み合わせて芸術の「行為作用性」を語る「芸術の人類学」を構想したジェルが、その著の最終章で「拡張した心」という発想に言及していることから、論者はパースの記号論を「心の哲学」として再構成する必要性を説き、第2章においてこれを実行していく。人間の「心」の諸相について明らかにすることを目指す「心の哲学」は、現代哲学において最も激しい議論の交わされている分野の一つであるが、そこでパースが引き合いに出されることは従来ほとんどなく、その欠を埋めるものとして本論文第2章は貴重である。

「心の哲学」研究としての本論文の独自性は、以下の諸点に認められる。第一に、心的な過程が頭蓋の外（メモ帳などの外部記憶装置）にも拡張されているとする、クラークらによる「元祖」「拡張した心」の主張の不備（心的な過程の「捉え方」の更新提案にすぎず実質的な「心」の「拡張」になっていない）を指摘した上で、子供が自己意識を獲得する過程を説明することを通じてパースが提唱した、独自の連続主義的・記号一元論的自己概念によってこれを更新することを提案している点である。第二に、パースのプラグマティズムの二側面、すなわち、信念の命題中心主義（信念は英語で言えばthat節で表される「命題」を目的語として持つ）と「プラグマティズムの格率」に由来する行動主義との両立を、ある命題を信じることはその命題の内的表象に行動の因果連関内の特定の役割を

果たさせることだとするフォーダーの機能主義を適用して行動主義を修正することによって図り、さらにこれに、フォーダーとは異なる独自の「パース的習慣に基づく意味論」（PH意味論）を付与している点である。第三に、記号過程の実在性を主張するパースの「スコラ的实在論」をベイカーの「実践的实在論」を参照しながら解釈しなおし、現代の「心の哲学」においてパースが占めうる反自然主義の立場を明確化している点である。最後に第四に、概念の分析的定義を放棄するプラグマティズムは思考の合成性を説明できない、という概念プラグマティズム批判に対し、既存の再反論を微修正した上で、それがパースの思想とも通じることを指摘している点である。以上のように、本論文は「心の哲学」のさまざまな論点におけるさまざまな立場を批判的に検討した上でパースに基づく独自の主張を提示しており、心の哲学の発展に寄与するところ大である。

以上のようにして包括的に再構成されたパースの「心の哲学」が、第3章においていよいよ美学の諸問題に適用される。最初に、実験心理学や認知科学、神経科学などの自然科学の成果を積極的に取り入れようとする、現代の「美学の自然化」の動向が概観され、その成果を適切に評価するのにプラグマティズムが必要であることが、「認識論の自然化」を提案するクワインがプラグマティズムへの移行を示唆していることを引き合いに出しつつ、説かれる。そして、その具体例として、第1章において検討された「芸術の人類学」の延長線上にあるジェルの「畏としての芸術」という考えと、同じく人類学者コーンの「思考する森」という考えが、それぞれ検討される。最後に、「パースのプラグマティズムに基づく美学」を「芸術作品を記号過程の表象と捉え、その記号過程がどのような推論を経てどのような解釈項を確立するに至ったのかを追求する理論」として提唱して、本論文は幕を閉じる。

ただし、この「パースのプラグマティズムに基づく美学」という壮大な構想が、細部において必ずしも十分な論証を伴っていないことは、致命的なものではないとはいえ、本論文の瑕疵として指摘されねばならない。今後の研鑽によってこの瑕疵が克服されることを、論者には期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2018年2月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。